鈴鹿山麓混成博物館 2019

展示解説

様々な水への祈り

日本武尊（やまとたける）と大蛇（のみこと）の葛藤

鈴鹿の山が生み出す様々な恵み
その最も大切な恵みに「水」がある
ただし、その水は、時として荒れ狂う水でもある。
人は、水を求め、そして遠ざけるために、
水を司る神に祈りを捧げた。

必要だけれども、遠ざけたい。
この微妙な心象が、水を司る神を「蛇」として表現した。
蛇は、水田を始めとする水辺に出没し、
うねるその姿は、水とのつながりを意識させ、
稔を喰う鼠を襲う姿は、稲作の守り神と意識され、
脱皮を通して甦る様は、命の永遠性をも意識させる。

まさに神である。
しかし、その姿は不気味であり、毒牙は恐ろしい。

聖邪併せ持つ蛇の姿は、求めたいが、
恐ろしい水を司る神に容易に結びついた。

ここでは、蛇を通して人と水との関係を追う。

2019年9月
鈴鹿山麓混成博物館

1 水源の神

全ての水は天に源を持つ。
地から湧き出る水も、遠い昔に天から降った水が地にしみ、
地表に姿を現したものであり、これが川となり湖となり海となる。そしてまた、天に戻る。
天と地が接するところが山頂であり、ここがすべての水の始まりと意識されたのは、当然の心象といえる。
山頂には神が宿る。その神は、山頂から見渡す範囲の土地を支配する。
言い換えれば、山で生まれた水が涵養する範囲を支配する。従って、高い山には強い神が宿る。
近江の最高峰伊吹山。ここに宿る神は、白き大蛇として出現した。

伊吹山

1-1 伊吹山の神

伊吹山は近江の最高峰であり、琵琶湖の北東、即ち鬼門に位置し、琵琶湖の水源の山として意識された。雪を纏い白く輝くその姿は、水の神の宿りを強く意識させる。

『日本書紀』に拠れば、伊吹の山の神に挑んだ日本武尊は、神の怒りを受け、もろくも敗れ去る。この時、伊吹の神は白き大蛇となって現れたという。まさに、琵琶湖の水源を司る荒ぶる神の姿である。この神話の解釈は様々であるが、大和が近江を支配するためには、田畑の水源となる「川」を制御する必要があったが、それは、多くの犠牲を伴う事業であった。その犠牲の象徴が日本武尊とも考えられる。

金蓮寺蛇石

1-2 蛇神の顕現 金蓮寺「蛇石」

鈴鹿の山を発した犬上川は、多賀町川相で南谷と北谷に別れる。南谷を遡ると大杉の集落に至り、ここで大杉川と合わさる。この集落に建つ寺院が「金蓮寺」で、その境内の片隅、山水が滔々と流れ落ちる小さな滝の傍らに「蛇石」と呼ばれる奇石がある。その姿はうねる蛇そのものである。

自然の造形であるが、人為的にここに安置されたのだろう。しかし、水しぶきを浴び、うねるその姿は、水源に宿る神の元へ向かう、その眷属の姿のようにも見える。蛇石をここに据えた者には、水と蛇神との関係が見えた。

2 芹川と多賀大社

鈴鹿山脈に坐す霊仙から芹川は生まれた。
石灰岩の白い谷を流れ下るうちに「奥の権現」「口の権現」といった聖地の水、
さらには地中を流れる「河内風穴」の水を加え、神秘的に青白く光る水を下流に運ぶ。
多賀町栗栖を経ると芹川の流れは、自らが造り出した扇状地の河道を流れ、母なる琵琶湖に至る。
扇状地を流れる豊かな水。これを田畑に引き込めば豊かな実りが約束される。
しかし、川は暮らしの場よりも深いところを流れている。水は決して上には流れない。
谷底を流れる水を、水田に導くため、人は、はるか上流に堰を造り、これを導いた。
そこに水を巡る、神と人との葛藤が生まれた。

2-1 水配りの要 調宮神社（ととのみやじんじゃ）

天照大神の親神を祀る多賀大社。この神が最初に降り立ったのが、多賀の背後に聳（そび）える杉坂山の神木杉とされている。ここに暫く留まった神は、招かれて芹川の岸に降り、ここに社殿を構える。これが調宮神社で、多賀大社の奥宮とされている。そして神は、さらに里に降り、多賀大社の杜に鎮座することになる。この神の動きは、山で生まれた水が里に招かれる過程を表している。

里に水を運ぶには、谷の出口に堰を設けて、ここから水を配らなければならない。この水配りの場所に、調宮神社が鎮座している。

調宮神社と芹川用水

2-2 里に招かれた水を見守る多賀の神

芹川の左岸に広大な杜を構えて、多賀大社が鎮座している。周知のように、多賀大社には天照大神に縁の国家神が祀られている。しかし、これは長い多賀大社の祀りの、中のほんのひとこまの姿にしか過ぎない。

栗栖の調宮神社で芹川左岸に配られた用水は、血管のように枝分かれしながら、芹川の扇状地を灌漑してゆく。その用水の一部が多賀大社の森の中に吸い込まれ、用水の前に社殿が建ち並び、さらにその水は奥書院の庭園に引き込まれ、神祭りがなされる。芹川の用水を人に分け与える神。これも多賀の神の姿である。

多賀大社

3 犬上川それは大蛇との葛藤の舞台

[犬神伝説]

昔、犬上川の上流に祟りをなす大蛇が棲み、人々を苦しめていた。
日本武尊の長男である稲依別王(いなよりわけのおう)は、愛犬小石丸を伴い、大蛇を退治するため川を遡った。
しかし大蛇は現れない。疲れた王は巨木の傍らで眠りに落ちた。すると、小石丸が激しく吠え立てる。
王はなだめるが、なおも吠え続ける。怒った王は小石丸の首を刎ねてしまう。
すると小石丸の首は梢に飛び上がったかとおもうと、何者かと戦う気配がし、
やがて大蛇の首に噛みついたまま川に落ちた。小石丸は樹上から王を狙う大蛇に気付き、
危機を知らせるために吠え続けたのだった。犬上川に伝わる神話では、日本武尊の縁者が蛇神と戦い、
小石丸という大きな犠牲を強いられる。この神話も、犬上川の開発と関連付けることができる。

大蛇ヶ淵

3-1 大蛇ヶ淵

小石丸と大蛇が闘った場所が、犬上川の大蛇ヶ淵であると伝えられる。ゆったりと流れてきた犬上川が、ここの部分で瀧のような激流となり、再びゆったりと流れる。川の流れの大きな変曲点は、水の聖地であり、大蛇ヶ淵を見おろす崖上に、水神を祀る「大瀧神社」が鎮座する。

大蛇ヶ淵は、適度な高低差があり、その上手は用水を取るのに絶好の場所である。しかし大蛇ヶ淵左岸の崖を削りながら用水路を開削する必要がある。これは難工事である。この川を利する工事を遂行するためには、強力な指導力が必要だった。しかし、大きな犠牲も強いられた。

犬上神社

3-2 犬上(いぬがみ)

大蛇ヶ淵神話には、犬上川の開発の歴史が投影されている。開発の指導者は、日本武尊が野洲の姫との間に設けた長男「稲依別王」。彼は、近江の開発に邁進した大和との血族関係を持つ地方豪族なのだろう。そして、彼に抗し、荒れ狂う川の流れが「大蛇」に、この闘いに払われた犠牲が「小石丸」に投影されている。

稲依別王は犬上氏を名乗る。この名は、小石丸が大蛇に噛みついた「犬噛」から生まれたとされているが、水により豊かな水田が生まれたことを踏まえれば「稲神(いねがみ)」がその語源であり、指導者も「稲魂の寄る水を人に分けた王」。

4 日本武尊の幻影 白鳥神社と蛇神

巨視的に見れば日本武尊神話は、大和がその覇権を全国に及ぼす過程の物語と、捉えることができる。
東西の間(はざま)で命を落とした武尊の姿は、東国支配のために大和政権が強いられた犠牲の象徴である。
微視的に、近江と日本武尊との関係を、稲依別王の苦闘とを勘案して見れば、
鈴鹿山脈から流れ出た川が作り出した、大小の扇状地の連なりからなる緩斜面の開発の歴史が、考えられる。
川の上流に堰を造り、用水網を整備し、田畑を潤す。この事業は個人の力ではなしえない。
水の流れを視野に入れた指導力の元で初めて実現する。
ここに大和の力が影響したか否かは判らないが、それに類した強力な指導力が求められたであろう。
この歴史が、日本武尊とその一族の残影なのかもしれない。

4-1 蛇砂川と白鳥神社

愛知川の左岸に延びる布引丘陵。その北を蛇砂川が流れている。この川は唐突に始まり、溜池からの排水などを集め、太さを増したり、減じたりしながら蒲生野の中を複雑に流れ、最後は西の湖に入る、人工的に整備された印象の強い川である。この蛇砂川の流域には何故か、彼の日本武尊を祀る白鳥神社が集中する。池之脇町白鳥神社・上二俣町白鳥若宮神社・市原野白鳥神社・高木白鳥神社・石谷白鳥神社・如来白鳥若宮神社で、非常に際立った神社の整列といえる。蛇砂川水利の整備の主導者が、日本武尊と結びついたのだろうか。

池之脇町白鳥神社

4-2 伊野部建部神社と日本武尊

もう一カ所、日本武尊の気配が漂うところが旧五個荘町の箕作山北麓である。ここは、愛知川の伏流水が、箕作山の根に当たり噴き出る処で、この湧水に源を発する川を用水として用いている。「西ノ庄澤」と呼ばれる湧水がその典型で、集落の中の湧水を集め、下流を灌漑する山本川となる。そして、湧水地の上に鎮座しているのが伊野部建部神社である。社伝に拠れば、犬上の稲依別王が、その父である日本武尊を祀ったことに始まるとされている。唐突な神話ではあるが、この二柱の神々が、用水の水源と関係深い神々、と考えれば納得できる。

西ノ庄澤

5 蛇の造形 勧請吊（かんじょうつり）

集落の出入り口や、神社境内の入り口に注連縄状の勧請吊と呼ばれる呪物が架けられているのを見かける。
県内の勧請吊の分布をみると、愛知川・蛇砂川・日野川・野洲川流域に特に多く分布し、
とりわけ蛇砂川流域に濃密に分布する。
その形状であるが、縄を縒り合せた注連縄状の主縄の中央にトリクグラズと呼ばれるリース状の輪を吊るし、
その左右に通常6本づつの小縄を下げる。これは1年を表す。主縄は頭と尾が明瞭に表現されることが多い。
主縄の形は「蛇」を象ったと考えると理解しやすい。そもそも注連縄とは、交尾の際に絡まりあう蛇の姿であるともいう。
一つの仮説として、勧請吊は水の神である蛇を象徴したものであり、
これを掲げることにより、蛇神からの水の恵みを一年を通して得たい。
そんな心象が根源に流れている、とも解せられる。

市原野白鳥神社

5-1 これは「蛇」だ

勧請吊は概ね、主縄、トリクグラズ、小縄で構成される。しかし、トリクグラズ、小縄を省略したタイプの勧請吊も比較的多くみられるが、掛け渡すことを前提とした勧請吊に、主縄の省略は当然のことながら無い。

東近江市永源寺市原野白鳥神社、如来白鳥若宮神社では、トリクグラズ、小縄を省略したほぼ同じ形状の勧請吊が掲げられる。主縄の上に細い縄をまげて櫛を通したものを3本、あたかも御幣のように突き刺す。それも、一曲・三曲・五曲する。これはどう見ても小蛇にしか見えない。小蛇を通して蛇神の恵みを継がれる事を祈念したのか。

甲賀市牛飼総社神社

5-2 小蛇の群れが親蛇に向かう

野洲川も鈴鹿の山に源を発する川で、この流域にも多くの勧請吊が分布する。野洲川中流左岸の旧水口町牛飼の総社神社は、神事麦酒祭が奉祭される神社として知られるが、この社殿前に掛けられる勧請吊が異様である。

トリクグラズを造らない、尾と頭が明瞭な主縄に、12本の細縄を束ねた小縄を12組吊り下げるが、その長さが異常に長い。5～6mはあろうか。従って、地を這い主縄に向かって立ち上がる。まるで、小蛇の群れが親蛇を目指して寄り集う様のように見える。蛇神を通した、豊かな水、そして稔りへの切願の造形に見える。

6 蛇神に打ち込まれる矢

勧請吊は、新年の行事として掛けられることが多い。そして、この際、弓射ちの神事が同時に行われることも多い。
また、弓射ちは勧請吊に伴わず、他の新年の行事に付随して行われることも多い。
弓は、鉄砲伝来以前の最強の武器である。この事から、新年を期して村落の中に「魔」が侵入するのを撃退する。
といった意味が込められているとされる。無論、その意味も込められているであろうが、もっと多様な意味もあるように思える。
正月とは、太陽の力が一番衰え、底を打ったその力がV字回復することを祝う行事、という性格がある。
また、弓矢には、玉依姫を身籠らせ、加茂別雷神（かもわけいかづちのみこと）を生ませた丹塗矢に象徴されるように、
命を注入する力があるとも考えられて来た。
この力に着目するならば、正月に打ち込まれる矢は、衰えた太陽神に力を注入するための呪物とも考えられる。
そして、勧請吊にも矢が射込まれる。

6-1 射込まれた12本の矢 真気神社

竜王町小口の真気神社は祖父川の左岸に鎮座する。祖父川は日野川の支流であるが、この流域にも勧請吊が濃密に分布する。

神社の参道に勧請吊が架けられている。杉の枝葉をリース状に束ねたトリクグラズが付く、一般的な形だが、ここに12本の矢が突き刺さっている。矢は青々とした若竹である。邪を払うのであれば、勧請吊自体が「邪」であり、これを一年を通して掛け続けるのはおかしい。むしろ、勧請吊は蛇神であり、真冬に力の衰えた神に、12か月分のパワーを注入したのでは。矢が若さ漲（みなぎ）る若竹であることも納得できる。

小口真気神社勧請吊に打ち込まれた矢

6-2 大蛇に打ち込まれる矢

日野川も鈴鹿の山を源とする。その水源の集落に日野町熊野があり、ここに熊野神社が鎮座している。神社の境内には、昔、祟りを成す大蛇を退治したとき、その首を埋めたという「おろち塚」があり、ここにも勧請吊が架けられる。また、鳥居と拝殿の間にも勧請吊が架けられる。

正月、このおろち塚に立てられた的を射る「お祈り」という行事が行われる。射手は、拝殿の前から、おろち塚の的に向かって矢を放つ。あたかも、本殿に居ます神が、冬に力の衰えた蛇神に向かい、その復活を促す力を注入しているように見える。

熊野神社「お祈り」

鈴鹿山麓混成博物館とは

鈴鹿山麓にある、東近江市博物館グループ（近江商人博物館、中路融人記念館、西堀榮三郎記念探検の殿堂、能登川博物館）・愛荘町立歴史文化博物館・多賀町立博物館が中心となり、関係する観光協会や民間企業とも連携し、鈴鹿山麓の文化を地域の資源として発信するため、2018年に結成された団体です。

〈事務局〉多賀町立博物館 TEL0749-48-2077

鈴鹿山麓混成博物館 2019

展示解説

様々な水への祈り

日本武尊と大蛇の葛藤

発行　2019年9月
鈴鹿山麓混成博物館
事務局　多賀町立博物館
TEL0749-48-2077

制作　鈴鹿山麓混成博物館

編集　公益財団法人滋賀県文化財保護協会

文化庁　この冊子は、平成31年度地域と共働した歴史博物館創造活動支援事業の採択を受けて作成しました。